

ザ！鉄腕シンフォギア！

パトラッシュS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

農業とは歌と同じく遥か昔から人々に語り継がれて来たものである。

この物語は五人の農業アイドルRADIOの戦いの記録。

シンフォギアと呼ばれるフルセットを身に纏いし五人は果たして世界を救う事ができるのか？

ザ！ 鉄腕／戦姫！ RADIOは農業で世界を救えるのか？

目次

序章	1
序章	2
序章	3
ノイズ畑 その1	30
二年越しのライブ	39

序章 1

綺麗な秋空の下、小麦の収穫時期、この村で五人の少女達が農業に励んでいた。

まるで、それが本業であるかのように重機を動かし、さらに、小麦の状態を確認、そして、栽培した後の土の状態も欠かさずチェック。彼女達はこの村で定期的に農作業をしにやってくる変わった女子高生達。

「ねえ、リーダー。今年は割と豊作だったね」

「せやねー、なんか最近、物騒な事件とかあったみたいやけどこうして無事に栽培できてよかったわー」

「だねー」

彼女達はそう言って、汗をぬぐいつつ。満面の笑みを浮かべていた。

私立リディアン音楽院高等科、農業部。

なんと、そこに所属する彼女達は農作業を主にした国民的なアーティストであり、アイドルなのである。

歌うことは稀ながらその人気は何故か高く、ライブの客層も建築の職人から農業者、男女の年齢層もバラバラで幅広い。

そんな彼女達はこの村での活動を主にADから指示を仰ぎ、今日も今日とて村の開拓に勤しんでいるのである。

もちろん、それだけではない。彼女達にはなんともう一つの顔があった。

「あ、ADから電話だ」

「えー、また電話？」

「ノイズが出たんやない？」

「あー、またあ？ もうフルセット着なきやなんないじゃん」
「兄イ、フルセットじゃなくてシンフォオギアね、シンフォオギア」

そう、なんと公式に日本政府から信頼されているスズメバチバスター、もとい、ノイズから人々の平和を守る駆除をお願いされている業者なのである。

――※本業はアイドルです。

彼女達五人は神話に登場する聖遺物をシンフォオギア（フルセット）として身に纏いノイズと戦っている。

その武器はそれぞれ個性的。

まあ、それは彼女達が戦う姿を見て貰えば皆様にはご理解いただけるだろう。

という事でノイズが出現したという市街地へすぐさま向かう農業部隊員達。

数分後、現場に到着してみると、そこには悲惨な光景が広がっていた。

逃げ惑う人々、そして、ノイズ達による蹂躪、そんな、ノイズの侵攻を受けた街の中にはもちろん灰と化した死人もいる。

ここで、謎の存在にして人類の天敵、ノイズという者達について説明しよう。

ノイズとは人類共通の脅威とされ、人類を脅かす認定特異災害である。

13年前の国連総会で特異災害として認定された未知の存在であり、発生そのものは有史以来から確認されていた。

空間からにじみ出るように突如発生し、人間のみを大群で襲撃、触れた人間を自分もろとも炭素の塊に転換させ、発生から一定時間が経過すると自ら炭素化して自壊する特性を持つ存在なのである。

詰まる話がスズメバチよりタチが悪い存在なのだ。

「あーもー、こんなに街を荒らして」

「よし、じゃあ、ぱっぱと駆除しちゃいますか」

「賛成ー」

そう言つて、楽器を持つ隊員達。

一体何をする気なのだろうか？

すると、ここで、彼らのボーカルである少女、胸が豊満で綺麗な黒髪を靡かせ、アホ毛が特徴の永瀬智絵はマイクを握る。

そして、ドラムを出現させた癖が強い金髪の短髪でツリ目の少女、岡松雅子に視線を向けた。

「兄イ、リーダー準備は？」

「ええでー」

「よーし、そんじゃみんなフルセット着るぞー！」

五人は息を大きく吸い、ゆっくりとそれを吐き出すようにして言葉を発する。

久方ぶりの本業、だが、彼女達はそれでも素晴らしい歌唱力でその言葉を聖歌のように告げた。

「Pioneer yamasiro tron」

「そんじゃ、さんのーがーはい！」

「オンリーユー♪」

そう言つと、五人の体に異変が起こる。

彼女達の胸にある石物が光を放ち、全員の姿がみるみるうちに変わっていった。

機械のような、それでいて、アーマーの様な物に身を包んだ彼女達は楽器やマイクを手にノイズと対峙する。

だが、この彼女達が身につけたアーマーをよく見てみるとその姿は

農作業着に適当に部品を引っ付けたような姿にしか見えない。

「やっべー、途中から聖詠の歌詞、わけわかんなくなっただけど変身出来た」

「お前はほんと本番で間違えるよね」

「ファイリングファイリング！」

「そんなんでいいのかなあ」

そう言つて苦笑いを浮かべる紫色のミディアムヘアが特徴の農業隊員キーボード担当の少女、国舞 谷子。

彼女達は五人で一つの聖遺物を身につけている。

それは古代から今に至るまで伝承に残っている伝説の建造物、聖遺物を基にしたシンフォギアを身につけているからである。

その名は山城。

この山城と呼ばれる建造物の伝承にまつわる道具をシンフォギアとして彼女達は使いこなすことができるのだ。

「そんじゃリーダー頼んだ」

「あいよー」

そして、フルセット（シンフォギア）を着てしまえばこちらのもの。キュラキュラと音を立ててブルドーザーに乗って我らがリーダーが満を期して登場。

ちんまい身体に茶髪の長髪で頭に白いタオルを巻きつけた彼女達を束ねるリーダー、城志摩 繁奈。

————別名、重機歴13年の女子高生（自称）

まるで農作業着の様なシンフォギア、山城を身につければ、例えば、スズメバチだろうがノイズだろうが怖くは無い。

「はい、ブルドーザー通りますよー」

安全第一のヘルメットを被った我らがリーダーはそう言ってノイズをブルドーザーで撤去していく。

先程までノイズから逃げ惑っていた街の人たちはそんな彼女の姿を見て目をまんまるとしていた。

そして、そんな彼らに襲いかからんとしたノイズ達も。

「そいー！」

なんと、急に真横から飛んできた謎の物質で構成されたまな板が頭に直撃し、消滅してしまった。

シンフォギア山城に身を包んだ雅子は人々の前に立ち塞がる様にしてまな板を構える。

そんな彼女の姿を見ていた人々は驚愕した表情を浮かべたまま、こんな言葉を発した。

「まな板…って…」

「ささ、今のうち今のうち、逃げて逃げて、刺されたら大変だから」
「あ、は、はい！」

そう言っつて、雅子から催促され、その場から駆け出す住民。

まな板を片手に構え、もう片手には包丁を携える雅子はニヤリと笑みを浮かべると対峙するノイズを見ながらこう告げ始める。

「さて、三枚が良いか四枚が良いか…見た目ヒラメっぽいしやっぱ四枚かな？」

「いやー、どっちかというどと蟹っぽいよ？」

「じゃあ三枚じゃないね」

「鍋がいいよ鍋が」

「あれ食べれんのかな？」

「リーダークルメ厄介。」

鍋にしたらノイズとて甲殻類みたいなやつもいるし食べられるのでは？ という彼女達の思惑。

だが、あいにくだが、ノイズは倒されると灰になってしまうので食べるができない。

ちなみにノイズの灰を使ってリーダーがお茶を作りたいとか言っていたような気もする。

「あ、お前ら来てたのかー」

「お！ おっす！ お師匠じゃん」

「相変わらずだな、おい」

そう言うと、赤い髪が跳ねたシンフォギア使いは見事な着地を見せ、彼女達の前に降りたつた。

彼女の名前は天羽奏。

彼女達のシンフォギアの師匠であり、同時に6人目の農業部の一人である。

農業部に関しては彼女達が勝手に奏を所属にしているだけなのだが。

「真実は！」

「いつも一つ！」

「いやー、やっぱりわかってるわ、流石、姉御！」

「毎回の事ながら今のやりとりって必要あるの？」

そう言つて、智絵と奏のやりとりに苦笑いを浮かべる国舞。

仲が良いのは良いのだが、毎回、智絵のノリに付き合っただけの奏も律儀である。

そこからビシガシググと仲良く手を合わせる二人のやり取りはもはや定番であった。

「あんた達もノイズ退治？」

「そうなんつすよー、ようやく小麦の収穫終わったと思ったらこれですからねー」

「あらー、そりや大変」

「いやー困ったもんですよ、はい」

そう奏と話しながら片手で出現させた謎の物質で構成された木炭や土器を生成し、それを投げつける事でノイズを消滅させる国舞。

また国舞から放られた土器は巨大化し、ノイズ達を屠っていく。

なんとこの土器、対ノイズ専用の遠隔型巨大土器なのである。

「そういや、つばっちは？」

「つばっちはあっち」

そう言つて、自身の相方である防人、青みがかった艶やかな長髪にスレンダーな体型をした美少女、風鳴翼がいる方を指差す奏。

ノイズに対し、刀を振りかざす彼女はまさに戦場に舞う名刀のようだ。

それを見ていた智絵は感心したように声を溢す。

「ほえー流石はつばっちだ、張り切ってんねー」

「いやー、カナッデー&翼はやっぱすげーよなあ」

「ちよいちよい、多津音、ツヴァイウイングねツヴァイウイング」

そう言つて、大工道具を扱いながらノイズと戦っている銀髪、短髪の健康的な褐色肌をした農業部ベース担当、山口多津音に突っ込みを入れる奏。

多津音がシンフォギア山城の大工道具で生成した建物はノイズを殲滅する要塞と化す。

その建築時間はシンフォギアの力を借りる事で短縮されておりな

んと驚きの3秒。

本職の方も腰を抜かすような驚き建築ができるのである。

「んじや、私もやるか。こいつらはちやっちやと粉微塵にするとしま
すかね」

「奏！」

「はいよ、わかってるよ！」

そして、天羽奏もまたノイズ達を前にして本気のスイッチが入る。
第3号聖遺物「ガングニール」。

天羽奏はそのガングニールの欠片より生成された、シンフォギアシ
ステムを使いノイズと戦っている。

ガングニールの鋭い槍がノイズ達を引き裂き、穿つ。

「また貴女達ね！ 毎回毎回、奏に会うたび無駄話をして！」

「へーい」

「すみませんでしたー」

「まあまあ、そんな怒んなって翼、私の可愛い弟子達なんだからさ」

そう言つて、奏の側までやって来た風鳴翼は不機嫌そうに農業部メ
ンバーにお説教を浴びせる。

ここは戦場、ノイズとの戦いの場。

そこにこんな農業作業の服を着た五人組がいるのだから場違いも
甚だしい。

防人として、到底見過ごすわけにはいかないというのが風鳴翼個人
としての見解であった。

「そんなピリピリしなさんなよ、つばっち。余裕が無いと頭も回らな
くなるよ」

「そうそう、私らも遊びじゃなくて本気で戦ってるんだよ、こう見えて
も」

「本気…本気ね…、じゃあ！ 聞くが、なんでまな板で戦ったりしてるのか、説明願おうか！」

翼はそう言うと、まな板と包丁でノイズ相手に大立ち回りをさせる雅子を指差して彼女達に告げる。

「……確かにまな板は食卓用品。」

だが、その風鳴翼の言葉を聞いていた雅子はノイズ達をその謎の物質でできたまな板で屠ると翼の元に飛んでくる。

そして、ノイズを倒しながら話を続ける翼はさらに声を上げる。

「まな板じゃ戦えないでしょ！ 普通！」

「ごもつともである。」

だが、まな板を否定された雅子はというと鋭い指摘を述べた翼の眼前まで迫る。

思わず後ずさる翼、何か言いたいことがあるのかとこちらも負けじと雅子の眼をまっすぐ見据える

そして、ノイズとの戦いの最中だと言うのにも関わらず翼の目の前まで迫った雅子はまっすぐに眼を見たままこう断言する。

「お前はまな板の凄さを何もわかってない」

「……」迫真で迫られた一言。

雅子のまな板の凄さを何もわかっていない。という一言に思わず呆気にとられる翼。

まな板の凄さとは一体なんなのか、どこをどうひっくり返してもまな板はまな板である。

そして、歌を歌いはじめる智絵を確認し、同じく歌を口ずさみハモリながら戦いに復帰する雅子。

「さて、私らもやるよ、翼」

「まな板の凄さってなんなの…」

「そりやもう後でいいから」

そう言うと、翼を先導するかの様に歌を歌いはじめる奏。

これが彼女達にとっての日常。

奏と彼女らが交わす何気ないやりとりはどこか命がけで戦う戦場を忘れさせるようなそんな安心感があつた。

それは風鳴翼にとつてはあまり面白くはなかった。

二人の絆は確かに深いが、奏が彼女達を可愛がる事で彼女を取られるんじゃないかという不安がどこかにあつたのである。

それに、自分の前では見せない顔を奏は時折彼女達の前で見せていた。

「安心しなよ、あいつらはあくまで弟子で私の相棒はあんただけだからさ」

「…別に…、わかってる」

そう言うとプイッとそつぽを向く翼。

そして、二人は歌を歌いながらノイズに向かい戦闘に入る。

シンフォギアを身に纏いし、五人の農業部とツヴァイウイングの二人。彼女達の戦いの日々はまだ始まったばかりである。

序章 2

ここは私立リディアン音楽院。

さて、我がダツシユ部の五人娘はノイズ退治もこなしながらこの学院で学業の方にも力を注いでいた。

というのも？ 彼女達の本業はむしろこちらと言わざるえないだろう。

音楽の学校なのに何故か農業部がある事が不思議だが、もはや、これこれ長いことやっているので学院の人達からも受け入れられている。

その理由は…。

「あー、兄イお願いがあるんだけどー、ウチらの部室の増築の件なんだけどさ」

「ごめん！リーダー！実は最近ウチの実家の野菜が売れ行き悪くってさー！」

「ねー、谷子ー、今度BBQを友達とやるんだけど炭の作り方ってどうすんの？」

「松姉え、料理教えてー」

「智絵ー、ちよつと見てよー、部活で使ってたピッチングマシンが壊れてさー」

とこんな具合に毎日、農業部は大盛況だからである。

そんなこんなで彼女達はあちらこちらに引っ張りだこ、毎日忙しい日々を送っていた。

これに加え、ライブやノイズ駆除、そして、ノイズの被害にあった被災地復旧の手伝いにたまたま街外れの村や無人島などにも足を運ぶため大忙しである。

「か、身体がもたへん」

「いやー、ハードだねハード」

「逆に捉えたらめっちゃ充実してない？」

「いやいや、ないない」

そう言う顔を引きつらせ智絵の言葉を全力で否定する多津音とリーダー。

ただでさえ、毎日のように学生から依頼が来るのに時間がいくらあっても足りない、さらには学校からも依頼が来る始末。

これにさらにライブやらいろんな本業での活動が上乘せされていけば、そうなるのも領けてしまう。なんでもこなせてできてしまうというのも考えものである。

そんな忙しい毎日の中でも。

「よー、今日也大忙しだなあ」

「!? 姉御ー！ 待ってましたー！」

「今日はドーナッツ！ プリン？」

「へへへー、残念、シュークリームでしたー」

「じゃあー！ テンション上がったきたー！」

こうして、たまに彼女達には師匠である奏から差し入れがやってくる。

奏も彼女達から農業部所属という事に勝手にされているが、こちらはツヴァイウイングのライブや身体の調整、翼の件もあつて彼女達の活動に積極的には参加できない。

その分、こうして彼女達に差し入れなどをしてあげ、少しでも力になれたらという心遣いを毎回差し入れという形で奏は示してくれているのだ。

「ごめんなー、大変なのにお前らも」

「何言ってますかー、姉御は畑の種植えや田植えとかも手伝ってくれたじゃないですか」

「げんや」

「だいたい、姉御は私らが勝手に所属してただけだし、こうして差し入れくれるだけでもありがたいよ」

「おおきになあ」

そうやって差し入れを持って来てくれた奏に感謝の言葉を述べる農業部、部員達。

奏は彼女達がどんな事をやっけてきているのかを知っている。

ノイズの被災地に赴いては炊き出しはもちろんの事。

破壊された建物の再建のお手伝い、はたまた、ノイズ襲来で家族を失った子供の保護を求めて働きかける運動など多岐に渡り行なっている。

こんな一見して、愉快的仲間とワイワイやっけている彼女達だが、その生い立ちは奏と重なる部分があった。

それは全員、ノイズで被災し孤児になったという事だ。

この五人はこの学院に来るまで、孤児だった。

五人で集まり、五人で逞しく生きぬき、そして、五人で生活していた。

なんでも五人でやっけてきたのである。周りから助けられ、五人で生きてきた。

彼女達の中心にはいつもリーダーである繁奈が居て、兄貴肌の多津音が居て、そして、他の三人が二人を支えて来た。

現在では製造不可能な異端技術の結晶である聖遺物の欠片より作り出されたアンチノイズプロテクター『シンフォギア』。

彼女達は自分達のような悲劇を繰り返さない為にノイズを駆逐する術を探していた。

世界を巡り彼女達はさまざまな文献を読み漁り、遺跡を訪れた。

何かの悪戯かそのノイズを駆逐する術を彼女達は世界を渡り歩き、模索している最中にノイズの襲撃に再び合うことになる。

その襲撃の際、彼女達の身体にはとある建物の破片が足や腕、頭部

などさまざまなところに入り込んでしまったのである。

それが、山城と呼ばれる古代から残っていた謎の建造物であった。

「あん時はやばかったね、医者から言われたもん、貴女、心肺停止3回くらいしましたよって」

「臨死体験したねー、ほんと」

「懐かしいなあ、なんで私らこうして無事なのか今でも不思議で仕方ないよね」

そうした、奇妙な体験が重なり、彼女達の手にはノイズを駆逐するための術、フルセット（シンフォギア）を手に入れるのに至ったのである。

そして、日本に帰って来たところをなんやかんやで特異災害対策機動部二課の司令官であり風鳴翼の叔父である風鳴弦十郎に捕獲されてしまった。

そんなこんなで、彼女達は特異災害対策機動部二課の監視のもと特別処置で放し飼い。

それで現在に至るといっわけである。

「なあ、今度さ、私らと一緒にステージに立ってよ、メインボーカルは智絵と私達で七人で歌えりやかなり盛り上がると思うし」

「えー、私らと姉御達が？」

「つばつちが嫌がんじゃないの？」

「バーロー、私が歌いたいって言ってんだからなんとかするって、それに…」

奏は優しい眼差しをダッシュ部員達に向ける。それは、彼女達の歌が紛れもなく一級品である事を知っているからだ。

それに翼にも彼女達の事をもっと知ってほしいと奏は思っていた。

何故、自分がこれほどまでに彼女達を気にかけるのかという事を理解してもらいたいと。

「いい加減、あんた達も翼も見返してやんないかね？」

「まあ、姉御がそうまで言うなら仕方ないよなあ」

「見返すって意味じゃ別の意味で毎度、度肝を抜いてたような気がするんだけど」

「まあ、そりやそうなんだけど」

そう言われてしまえばたしかにそうなのだが、奏が言いたいことは
そう言う事ではない。

「ーーいろいろな意味で度肝を抜く事には長けている。

それはそうだろう、彼女達が毎回あんな戦い方をしてれば驚きの連続だ。それが、シンフォギアでやっているというのだからなおさらである。

すると、ここで国舞がふとした疑問を奏に対して投げかけはじめる。

「でもさー、姉御が私らに目をかけるのってそれだけじゃないよね？」

「んー…そうだねえ…。なんて言えば良いかなあ」

そう、確かに同じ境遇であるものの、それにしても理由は薄いように感じたのだ。

奏が彼女達を目をかけ、可愛がっているのは別の理由があった。

奏は智絵のそばに近寄るとガシッと肩を組み顔を寄せて、農業部の全員にこう告げ始めた。

「どう、智絵と私って似てるだろ？」

「いやどうって…」

「まあ、髪型と目の色を除けば顔のパーツとかそっくりちやそっくりですけど」

そう言つて、顔を近づけてみせる奏の言葉に肯定するように頷く多津音。

するとここで、奏から衝撃の言葉が飛び出して来る。

「実はさあ、従姉妹らしいんだよね、私達」

「ええ!? マジで!」

「え! 嘘でしょ!」

「ほんとほんと、対策機動部二課の人から教えてもらつてさ、奇妙な縁だよ」

「え!!? そうだったんすか! マジで!」

「いや、お前も驚くんかい」

そう言つて、肩を竦める奏。そして、事実を聞かされ驚愕の表情を浮かべる智絵に突っ込みを入れるリーダー。

確かに顔の形は似てるし、やたら智絵のノリに付き合つてあげる奏の姿を毎回目の当たりにしているので何かしらあるんだろうなとは思つてはいたが、境遇が一緒の従姉妹となれば確かに親近感が湧いても仕方ない。

それにと、奏はさらに話を続ける。

「それとき、しげちゃんがさ…。私の妹に似てんだよね面影とか」

「えー! このちんちくりんがですか!」

「女子力が皆無で中身おっさんですよ!」

「おい、ちよい待て、君ら僕をなんやと思つてんねん!」

「あはははは、…まあ、面影もそうだけど、顔つきなんかもね…それが理由かな?」

そう言つて、暖かい眼差しを繁奈に向ける奏。

もし、妹が生きていたのならこんな感じじゃないだろうかという彼女に重ねている部分があった。

しかし、それを聞いた彼女達はどうと。

「絶対、姉御の妹さんの方が可愛い」

「間違いない」

「……………」

「リーダー元気だしなよ」

リーダーと奏の妹を比べるのが失礼だと言わんばかりの全否定。あまりの言われように、リーダーの背中からは哀愁が漂っている。しかしながら、あのツヴァイウイングの天羽奏の妹ならば確かにそう断言されても致し方ないと言わざる得ない。

「……わかつとったで。」

落ち込むリーダーを慰める国舞。

とはいえ、彼女達が今の今までこうしてまとまってこれたのはリーダーである彼女のおかげであることは言うまでもない。

それからしばらくして、奏は部室にある席から立ち上がると扉に手をかける。

「あ、姉御、もう行くの?」

「悪い、この後、翼とライブの打ち合わせがあつてさ」

「あー、なるほど、姉御も忙しいねえ」

「はははは、もう慣れっこさ! あ、そう言えばいい忘れてたんだ」

そう話しながらドアノブを回し、扉を半開きにしている奏は足を止める。

「どうやら、最後に何かしら彼女達に言いたいことがある様子であった。」

奏は笑みを浮かべたまま、こんな話を彼女達に切り出しはじめた。

「私になんかあつたら、あんた達に翼の事、お願い出来るかな？　ほら、こんなご時世だからね？」

そう告げる奏は優しい表情をのぞかせながら話す。

ノイズとの戦いは紙一重の戦いもある。これから先、自分に何があるのかわからない中、信頼できるのは彼女達だ。

すると、彼女達は全員、奏のその言葉を聞いて顔を見合わせると満面の笑みを浮かべてサムズアップを返した。

「任せときなよ！　姉御の為なら私ら何でもやるからさー！」

「そうそう、心配ご無用！」

「ははっ。それ聞いて安心した。それじゃあんた達も良かったら私達のライブ見に来なよ！　じゃね！」

そう話しながら、扉を開いて部屋から出て行く天羽奏。そんな彼女の後ろ姿を彼女達は静かに見送る。

毎日が輝いているような明るさが天羽奏にはあった。

こうして、天羽奏と別れたリーダー達は改めて、今回、差し入れて貰った奏のシュークリームを頂く事に。

だが、彼女達はこれが、シンフォギアの師であり、大事な部員である天羽奏との最後の会話になるとはこの時、夢にも思っていないかった。

序章 3

天羽奏が亡くなったのは数ヶ月後のライブの日であった。
ツヴァイウィングのライブ中に突如出現したノイズ。

逃げ遅れた上に重症を負ってしまった立花響を救う為。己の命を燃やしてノイズを殲滅する禁断の切り札である「絶唱」を歌った事でそのバックファイアに耐えられず戦死、その肉体も灰となつて散つた。

最後の会話をしてから数ヶ月後の出来事。

天羽奏の墓の前で喪服を着た彼女達は奏と共に可愛がっていた愛犬、北登と共に御墓参りに来ていた。

「…ほらー、北登。姉御だよ、ちゃんと挨拶して」

「ワン！」

「よーしよし、そっかそっか、お前も嬉しいか」

天羽奏の墓石の前で尻尾を振る北登を撫でながらそう告げる兄貴肌の多津音。

久方ぶりの再会はこんな形になってしまつて残念だが、この墓石が誰のものなのか北登もわかつているようであった。

墓石の前で黙祷と合掌。

ノイズとの戦いの末に他人の命を守る為に戦った彼女にどうか安らかに眠ってほしいという願いを込めて彼女達なりの涙を堪えての合掌であった。

すると、しばらくして彼女達の背後から声が聞こえてくる。

「…葬式以来か？ 久しいな」

「あ、おっちゃん」

「前より彫りが深くなつてね？ 師匠」

「ははは！ ここ最近忙しくてな！ 皺が増えたのかもしれない」

そう言つて、喪服の彼女達に声を掛けて来たのは特異災害対策機動部二課の司令官であり風鳴翼の叔父である風鳴弦十郎。

彼女達にシンフォギアの扱い方についてレクチャーし、なおかつ、放し飼いを許可している張本人である。

彼女達にとつてみれば、奏の次にお世話になつた人物と言つても過言ではない。

では、そんな彼が今回、彼女達に一体なんの用があるのだろうか？

「実はな…奏からお前達に伝えておきたかつた事があつたらしくてな、今日はそれを伝えに来た」

「…姉御から？」

「そうだ、あの日のライブの前に、あいつはお前達のユニット名を考えていてな」

そう言つて、フツと優しい笑みを浮かべる弦十郎。

確か、以前、農業部ではなんだかパツとしないし、自分たちもアイドルなんでツヴァイウイングみたいなカッコいい名前が欲しいと奏に相談した事を彼女達は思い出す。

そして、弦十郎は五人に向かいゆつくりと口を開くとこう告げ始めた。

「RADIO、それが奏がお前達に相應しいと言つていた」

「RADIO…RADIOね」

「……奏が考えてくれた名前。」

わざわざ律儀にもちゃんと考えてくるあたり、あの人らしいと彼女達からは笑みが溢れでる。

だが、そうであってもやはりそれを聞きたかつたのは元気で明るかつた彼女の口からだつた。

「うん、いいんでない？ 姉御ってば流石のセンスだわな」

「師匠の口からじゃなくてあんたの口から私らの前で言っただけで欲しかったよ…」

そう言いながら、奏の墓石に視線をやりつつ、口々にそれぞれの感想を述べるRADIOの面々。

「……なんだかしんみりとしてしまう。」

ありがとうももう伝えられないし、恩返しもできない。こんな寂しい事があるだろうか？

できるとすれば、彼女の心残りだった事を解消してあげる事くらいだろう。そう、風鳴翼の事である。

「つばっちは元気？」

「翼か…翼はな…」

そう言って、弦十郎は考え込むようにして、しばらくして彼女達に風鳴翼について語り始めた。

「どうやら、目の前で奏を失ったショックから最近では食事を摂らず、部屋にこもりっぱなしになってしまったとか。」

確かに彼女達も同じ立場なら気持ちはわかる。もし、自分たちのリーダーがそんな事になったら、彼女達は自分を抑える自信はない。下手をすれば生き返らせる術をどんな事をしてでも編み出すつもりでいる。

だからこそ、翼の現状を知った彼女達は。

「リーダーなんとかしてやれないかな？」

「うーん、せやね」

「奏が不在という事でツヴァイウイングのライブツアーも中止にする予定だ」

「ん？ 待てよ？」

とその時、国舞はピタリと何かいい考えが浮かんだのかそう声を溢す。

以前、奏が言っていた話を思い出していた。そう、そう言われてみれば、いるではないか、天羽奏の代わりになる奴が。

一同は北登をナデナデしている智絵へとここで視線を移す、これはもしや…。

「ん？ 何？ どったの？」

「リーダーちよつとちよつと」

「ん？ なんやねん」

そう言つて、智絵以外のRADIOメンバーは何やら集まるとヒソヒソと話を始めた。

何を企んでいるのだろうか？ さりげなく弦十郎も彼女たちに混じり話に参加している。

そうして、数十分後、彼女達は顔を見合わせると再び、智絵の方へ視線を向ける。

「やるっきやねーか」

「まあ、どうにかなるっしょこいつなら」

「うむ、そうしてくれると助かるといえば助かるな、ツヴァイウイングのライブを楽しみにしている人たちもいるし緒川君には俺から話しよう」

「へ？ 何？ なんの話？」

そう言つて置いてきぼりの智絵をよそに何やらトントン拍子で話が進んでいる。彼女は首を傾げたまま北登からペロペロと頬を舐められていた。

そうして、RADIOメンバーは智絵の肩をポンと叩くと満面の笑

みを浮かべサムズアップをする。

「安心して逝って来い！」

「大丈夫！ お前なら上手くやれるよ」

「だから何がっ!?!」

というわけで後日。

智絵は訳がわからないまま、何やらAD緒川さんに連れられて、美容師やメイクさんから色々と弄られる事に。

そうした結果できたのがこちら。

「おー、姉御、お久しぶりー！」

「意外といけるもんだよね」

そこに出来上がったのは奏になった智絵の姿だった。

なんと、ツヴァイウイングの活動を継続させるために彼女達は奏の代わりを用意！ それが、この瓜二つの智絵を使った奏さん復活作戦である。

だが、変装させられた智絵はというと？

「いやいやいやいや！ 無理無理無理!? あんな踊り踊りながら歌うなんて！ ちよつとおー！」

「はい、小型のマイク変声機」

「はいじゃないわ！ はいじゃー！」

そう言っつて、いい歳した自分が奏の様に振る舞うのは無理だと言っつて聞かない智絵に容赦なく変声機を渡す国舞。

――精神年齢的にキツイものがある。

それは確かに本業真つ盛りの時ならともかく、農業しか最近してき

てない彼女にはあんな踊りを踊りながら歌うなんて中々ハード。
それに加えて…。

「いや、確かにミュージシャンやらヤクザやら色んな役はやったことあるけども流石にメツキ剥がれるって!」

「なんでもできるのが当たり前でしょ! 今更無理とかない!」

「…他人事だと思ってこれだもんなー…」

「……やろうと思えばできる。」

というわけで、目以外、完全に奏と瓜二つにした智絵はこうしてツヴァイウィングとRADiOの二足草鞋を無理矢理はかされる事に。

そんなわけで、早速、閉じこもっている翼の部屋に彼女達は訪れる事にした。

「…どうしよ、これ翼ちゃんにバレたら消されるよ」

「大丈夫だって、なんとか私らで姉御を復活させるやり方考えるからさ」

「そうそう、一時の間だけだから」

そう言つて、智絵の背中をバンバンと叩く多津音と雅子の二人。

確かに今のままではライブもできないだろうし、ツヴァイウィングを楽しみにしている皆もガツカリしてしまう。

ノイズ襲撃があつた今だからこそ、元気を届けなければいけない。

深呼吸した智絵はフウーと息を吐くと、閉じこもっている翼の部屋の前で変声機で声を変えるところ声を掛けはじめ。

「おーい、翼ー、いつまでそうしてんだ?」

「…!?!」

そうして、変声機でその声を聞いた部屋の主である翼はバタバタと何やら急いだ様に支度をすると思ふ扉を開けた。

聞き覚えのある声、もうあの日、彼女が目の前から消えた時から聞こえることはないだろうと思っていたその声。

扉を開いた風鳴翼は涙を浮かべながら、その声の主を求め、顔へと視線を向ける。

「よお、しけた顔してんなよ」

そこに居たのは紅掛かっている綺麗な髪に、跳ね毛が特徴のツヴァイウイングの片割れが何事もなかったかのように立っていた。

いつものように笑みを浮かべた彼女、天羽奏の姿がそこにあった。

「奏ッ…！ …ど、どうして！ あの時確かに！」

「まあ、いろいろあってな、色々」

そう言っ、言いずらそうに翼から視線を逸らしながらぽりぽりと頬をかく奏の変装をした智絵。

内心ではいつバレるかわからないという不安で心臓がバクバクである、いくら演技の経験があるからと言っても怖い。

リーダー達は奏を復活させる方法を考えると言っていたが、本当に宛てにして良いのだろうか？

すると、感情を抑えきれなくなったのか、翼は涙を流しながら奏に変装した智絵に抱きついてきた。

「…心配させてっ!! 絶唱を使って、あんな…あんな消え方なんかしたら…死んだって!」

「そりや悪かったな…、私もちよつとあの時は余裕がなかったからさ」
「馬鹿っ!」

そう言っ、抱きつきながら涙を流す翼の頭を優しく撫でてあげる智絵。

だが、彼女はある時、冷静になって考える。そう言われてみれば、自

分はなんでこんなことをやっているのだろうか。

(あれ?　なんでこんなことしてんだろ?)

おかしい、冷静になつて考えれば別にツヴァイウィングの代わりに自分たちが楽器持つて本業のツアーをやればよくないだろうか?

何故、自分はこんな地雷の上で綱渡りみたいな事になっているのだろう。

まあ、何はともあれ、部屋に閉じこもっていた翼を外に出す事には成功した。

「ままま、何はともあれ、とりあえず飯いこーぜ!　飯!　私、腹減つてきー!」

「もう奏つたら!!　∴私だけ置いて、もう突然∴居なくなつたりしないですよ?」

「∴ひ、ひゃい!」

――背筋が寒い。

これがもし、自分だとバレたら背中からざっくり刺されたりしないだろうか?

というより、智絵の懸念はもう一つある。

そうシンフォギアである。奏のシンフォギアは言わずとも知れた第3号聖遺物「ガングニール」。

その一方で智絵のシンフォギアは山城。そしてその武器は?

(つれたか丸出したら一発アウトだなこれ)

――なんとなんと漁船である。

つれたか丸と呼ばれる漁船を使い、ノイズ達を屠るのが主な戦い方、これを見られた時に翼になんといい訳をすれば良いのか。

ガングニールが漁船になりました。で通用するわけもないし、詰ま

る話がどう切り抜けるのかが肝になってくる。

最悪の場合、智絵は、最近、マグロの一本釣りにはまってガングニールをリーダー達から漁船に変えてもらったという苦しい言い訳を考えてはいる。

果たしてそれが翼に通用するかどうかは不透明なところではあるが。

「ねえ、奏、それでご飯は何食べるの？ うどん？」

「そうだねー、うどん良いよね、私も良く作ったよ、小麦から手打ちにして」

「え？ 小麦から？」

「そうそう、小麦から、まずは土を耕して小麦を作るところから始めるんだけど…」

「え？ そんなところからはじめるの!?!」

そうやって、驚いた様に声を上げる翼。

今まで、奏がそんな事をしているとは彼女も初耳であった。

そんな中、つい、土から作ると口走ってしまった智絵は冷や汗をかきながら思わず内心で声が溢れる。

(あ、やべ、つい癖が出た)

ー！ー！いつもの癖。

なかなか、普段から癖というのは治りにくいもの、それが、日常的にやっていたのならなおさら身につけてしまう。

智絵は笑い声を上げながら誤魔化す様に、翼に向かってこんな風な話をし始めた。

「そうそう！ 多津音達がさ！ そっからはじめるもんだから私もね

？」

「…ふーん…」

「ねえ？ 翼、今度あんたもやってみたら良いよ、身体動かすから体重減るし、一石二鳥だよ？」

「奏がそこまで言うなら…考えとく」

そう答える翼はどこか不機嫌そうになっていた。

気持ちにはわかる。大方、いつものことだろう、早い話がやきもちだ。それは、奏でなくともリーダーやRADIOメンバーは全員気づいていた。

本当に難儀な性格である。

(リハ、多めやつとかなないとやばそーだなー)

そして、一方で智絵はこんなことを考えていた。

翼の事もそうだが、何より、ツヴァイウイングとRADIOの二足草鞋をやるのなら両方のリハをかなり多めにしとかなければならない。

特にツヴァイウイングの方は念入りにだ。そう、自分が演じる天羽奏に違和感を感じさせない様にしないとイケない。

「あれ？ これってよく考えたらめっちゃ本業やってね？」

「ん？ 何か言った？」

「あ、ああ！ なんでもないよ！ 独り言独り言！」

「…？ そう？ それならいいんだけど」

そう答える智絵に首をかしげる翼。

こうして幸先が不安な即席コンビが出来上がってしまった。いつバレてカオスな事になるのかひやひやするコンビである。

果たして、ツヴァイウイングとして二人は機能するのだろうか？

一方、その頃、他のRADIOメンバーはというと？

「タイムマシン作らないとな」
「タイムマシンってバツクトウザフューチャーみたいなのよね？」
「ちなみにどのレベルから作るの？ やっぱ鉄作るところから？」
「石油掘るところからでしょ」

という具合に本物の天羽奏を用意すべく、なんと、タイムマシン作りを考えていた。

理想としては、デロリアンの様な車のタイムマシンが望ましいといった具合である。

シンフォギアシステムを使ってこれができないだろうかと模索中である。だが、考案段階なので完全な完成はまだまだ先の話になるだろう。

果たして、これからどんな事が彼女達を待ち構えているのか！

それは次回！ 鉄腕／シンフォギアで！

今日のRADIO。

1. 天羽奏の代わりに智絵を派遣。
2. 智絵、アイドル二足草鞋。
3. 名前がユニット名RADIOに決まる。
4. タイムマシン作りに挑戦。
5. シンフォギアが漁船。

ノイズ畑 その1

二人の歌姫がステージに舞い降りる。

観客は沸き、歓声を上げそれを迎える。紅と蒼の対照的な二人のその姿が鮮明に瞳に焼きつく。

ツヴァイウイングという二つの翼はそれほどまでにインパクトのあるコンビであった。

そう、だがしかし、その片割れは本来ならこんな風に踊ったりする様な少女ではない。

ではないので？

(やっばい、めっちゃキツイ、明日、筋肉痛だわー、これ)

当然、こうなることは目に見えて明らかだった。

——本業は農業系アイドル。

ちなみにこれで華の女子高生という肩書きでやっているというのだから驚きである。余計なプレッシャーで変な汗まで流れ出てくるので尚更たちが悪い。

(未来照らす、だったよね？ 確か!!)

内心でそんな忘れ気味な歌の内容を浮かべつつ、隣で舞う蒼の衣装を身に纏う風鳴翼に視線を向ける智絵。

ツヴァイウイングの天羽奏の代打で変装してライブを繰り広げているとはいえ、彼女も慣れない歌詞に振り付けと混乱しつつある。これは危うい。

本来なら、楽器持つてる他四人がいてボーカルの自分がマイク持つて歌うだけだというのに今回は振り付け踊りながら歌うこのハードさ。

リハは繰り返してやってきたものの、いかに自分が今まで本業をやっ

ていなかったのかを思い知らされた気がした。

振り付けをしながら歌うのは何年振りだろうか？ 遙か昔のことだったような気がする。

そうこうしている間に曲は終わりに向かう。

そして最後は…。

(…によきっ!!)

二人でによきつと手を伸ばして終了。

振り付けも完璧に真似できた。という一応の自信が智代にはあった。これでもアイドル歴数十年以上のベテラン、しかもボーカルを張っていただけあってやればできるものである。

そんな、彼女と風鳴翼のライブの様子を遠目から眺めていたRAD IO 隊員達はどういうと？

「あれ無理だよねー、私、最期のによきつてするやつしかできねーよ」

「よくやるよねー、若いってすごいなあ」

「やっぱ、末っ子の智絵やつといて正解やったな」

「…一応、女子高生だけだね、私ら」

——おっさん臭い女子高生アイドル。

そんな中、ライブを終えた奏の変装をした智代は息絶え絶えに笑顔で手を振りながらファンに伝える。

ファンに伝える彼女に寄り添って、同じく腕を組み手を振る翼。

そして、そんな姿を見た一同は。

「あれ？ これ昨日、私ら結成して、もう解散危機じゃない？」

「RADIOって名前、姉御に貰った数日で解散危機ですか」

「どうかぶっちゃけもう解散していいよね」

「ちよつとやめてくださいよほんと」

ー自分達が歌う必要があるのか。

正直な話、あの姿を見てたらずつとあのまんまでいいんじゃないのか？ と彼女達は思った。

それなら自分達は農業や建築や開拓に力を注げるし、なんの問題もないのでは？ と。

しかし、そういうわけにもいかないのです、致し方なくその光景を確認した一同は肩をすくめて顔を見合わせるとため息を吐いた。

「仕方ない、とりあえずなんとかかなりそうなのは確認できたし、学校に戻りますか」

「デロリアン出来んの、まだ、だいぶ先になるけどねー」

「まあ、それまであいつには頑張ってもらいましょう」

そう言つて、整備服を担ぎながらツヴァイウィングのライブ会場を後にする四人。

それから、ツヴァイウィングはしばらくの間、ライブツアーを順調にこなし知名度をさらに大きくしていく事に。

さて、我がRADIO隊員達はそうこうしている間にもう一つの作業を行なっていた。

というのも、当然ながらタイムマシン作りと並行して農作業もやるわけで、それに関して、新たな試みを行おうと考えていたわけである。それが…。

「おー、ここのノイズ畑もいい感じに耕せてきてるよねー」

そう、ノイズの灰を使った画期的な野菜作りである。

本来、ノイズは倒されれば灰になり消えてしまう。だが、このノイズの灰に目をつけたのが、RADIO達である。

ノイズの灰は正直、街の人々も処分に困っていた。ノイズからは街をやられてしまい、至る箇所の修復作業に追われてしまう。

当然、その作業を行う上で灰は邪魔でしかない、なので、集めて処

分してしまうのが常だ。

だが、彼女達はというと、これを…？

「え！ その灰！ 捨てちゃうんですか！」

「これ！ まだ使えますよ！」

そう、全部、いただいてくる事に。

その理由は、このノイズでできた灰に秘密があった。この灰、一見見た目は普通の灰だが実はまだ使い道がある。

そう、カリウムと石灰分を含む肥料になるのだ、水溶性のカリウムが多くこれなら即効性がある肥料にも申し分ない。

この灰を使うことで、本来ならノイズから荒らされた農家の畑も本来の豊かさを取り戻すに違いない。

そういうわけで、我らがRADIO隊員達は翼や智絵を歌わせている間にノイズの灰集めに勤しむ事になった。

歌っている翼と智絵達の戦闘シーン？ そんなものは無い。

彼女達は本業の方で手一杯の筈、そういった心遣いもあつてか、我らがリーダー達の手にもやる気がみなぎっていた。

「やっぱ鍬持つてるほうが落ち着くな！」

「楽器よりスツゲー手に馴染むよな！」

ーととりあえず歌は任せた。

そう言わんばかりにノイズ畑の開拓を進めるRADIO隊員達、暇さえあれば、灰を仕入れにノイズ狩りへ。

この女子高生達には果たして、ホームセンターで肥料を買うという考えはないのだろうか？

これで、風鳴翼と同じようにステージに立つ自称アイドルというのだからびっくりである。

「スイカは育つかねー」

「どうかなあ、甘さを引き出すのは得意分野だけれど」

「心配すんなよ！ 私ら何年スイカ作ってきたと思ってんだ！」

「そうだねー、かれこれ何年も作ってるよね」

そう言つて、笑い声を上げながら鍬を担ぐRADIO隊員達。

スイカ作り歴数十年のベテランが言うのだから間違いない、きつと美味しくて甘いスイカがこの畑にできる筈。

西瓜と書いてスイカ。果実を食用にするために栽培されるウリ科のつる性一年草。また、その果実のことである。

日本では夏の定番。球形または楕円形の甘味を持つ果実を付ける。

果実は園芸分野では野菜とされるが、青果市場での取り扱いや、栄養学上の分類では果実的野菜に分類されている。

この西瓜の収穫時期は夏。

まだ季節的には先の話にはなるが、このスイカは赤い身はもちろんのことながら、外側も漬け物にして食べると実に美味、お酒のつまみにもなる。

「あれはやっぱ美味しいよなあ」

「きゅうりの漬物大好きなんだよねえ」

「わかるー」

そう言つて、シャリつとした歯ごたえのスイカの外側を使った漬物を思い出し、彼女達のますます期待は高まる。

さて、こうしてあらかた畑の種植えを終えると次なる作業へ、それはもちろん、この村で作っているタイムマシンである。

シンフォギアシステムを独学で勉強し、あらゆる専門家の師の元へ彼女達は訪ねに出かけた。

まずは、身近な櫻井理論の提唱者である櫻井了子さんを始め、アメリカの聖遺物研究機関F・I・S・の研究者。フルネーム、ジョン・ウエイン・ウエルキンゲトリクスさん。

果てにはナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ教授のところま

で、一足飛びで出かけていく始末。

——フットワークが随分軽い。

そして、いつもどおりに専門家達を前にしたRADIO達はこう告げるのだ。

「こんにちはー！ 私達、鉄腕シンフォギアの者なんですけどー。実はお聞きしたいことがありますよ」

そうして得た知識と引き換えに、彼女達は自分達のシンフォギアの情報を彼らに提供し、互いに損得が無い関係に。

とは言うものの、彼女達の使う聖遺物自体が意味不明なため、解析分析はかなりの困難を極め、現在でも未解決のままなのである。

そんな彼女達の使うシンフォギアは一部の専門家の方々、主に櫻井了子をはじめとしたシンフォギア研究の学者の頭を大いに悩ませる事となり。彼女達からこう名付けられる事になった。

——その名もダツシユギア。

どうやら歌だけではなく、農業やその他類のものをするだけでシステム数値が上がる事からそう名付けられる事に。

ちなみに電車に対して全員でリレーをしたり刑事100人と鬼ごっこしたりするだけでも対ノイズへの力が上がるといふ原因不明、意味不明なシステムだ。

そもそも、武器がまな板、土器や漁船や重機や大工道具である事からしてすでにお察しだと言えるだろう。

と、話は変わってしまっただが、このように彼女達は無事にノイズ退治で畑を作りながら並行してタイムマシン作りも行いう事が出来ていたわけである。

「シンフォギアって奥深いよねえ…」

「作るのはやっぱまだ難しいよ、あれは」

——アイドルなら、シンフォギアくらい自作で作れ

そんな風な言葉が果たして彼女達には聞こえているのだろうか？

とは言え、本来の目的はもちろん奏を取り戻す為のタイムマシンである。

わざわざ、中東まで飛んで石油を貰ってきたのだ。形にしなければならぬ、そこは彼女達にも譲れないプライドがある。

「シンフォギアの装者にもたらす特性は、身体機能上昇、音波振動衝撃によりノイズの侵食を防護するバリアコーティング機能、更にはノイズの在り方を調律し人間界の物理法則下に強制固着させて攻撃を有効化する、位相差障壁の無効化の3つだったよね？ 確か」

「つまり？」

「衝撃の緩和に留まらず宇宙空間での活動、大気圏突破、再突入できるくらいの装甲があるんだそうで、つまり、すんげー堅い車ができるって事だな」

「おー、なるほど」

「てか、私らのやつは櫻井先生がシンフォギアじゃなくてダツシユギアって言ってたよ？」

そう言つて、シンフォギアに関して専門家である櫻井先生の言葉を思い出しながらそう告げる国舞。

本来、シンフォギアは装者らの戦意に共振・共鳴して旋律を発生、それに合わせて装者が歌唱することによってその力を高める機構となっている。

故に装者は歌いながら戦う必要がある、ダメージなどによって歌唱が中断されると力は一時的に弱まるとされているのだが、彼女達の場合合は途中で歌詞は間違えるわ、別のことをしはじめると普通なら力

が弱まる事を平然と戦闘中にやっている。

だが、至って特にパワーダウンなどは見られない、なぜなら、この歌を補う形で別のものが共振、共鳴しているのである。

それが、第一次産業をはじめとした農業。

つまり、彼女達のシンフォギアはシンフォギアであってシンフォギアではないのである。

というわけで櫻井先生から付けられた彼女らのフルセットの名前はダツシユギア。

別名をフルセットRADIIII、スズメバチ駆除もできる素晴らしいシンフォギア、もとい、ダツシユギアなのである。

と話が逸れてしまったが、このシンフォギアの性能を聞いた彼女達はというと？

「なるほど、なら、超スピードで時空ぶっ飛んでも装甲がぶっ飛ぶ事はないと」

「そういうことやね」

我らが兄貴、棟梁、山口多津音はそう言ってコンコンとテロリアン車作りに使う特殊な装甲を金槌で叩いていた。

時速140km以上のスピードで世界を越えるタイムマシン作り、これで、奏をこちらで回収して智代と入れ替えればみんなハッピー、事なきを得れる。

だが、これを作るのは大掛かり、人手が欲しいところ。

「2年くらいはかかるんじゃない？ 目安だけど」

「そっかーそんなくらい掛かるかーやっぱり」

「まあ、大丈夫やろ」

来年には、ノイズ畑のスイカの収穫もある。

そう言うことで始まったデロリアン作り、RADIOのメンバーは果たして天羽奏を回収する事ができるのだろうか？

この続きは！ 次回！ 鉄腕シンフォギアで！

今日のRADIO。

1. ノイズを肥料に使う。
2. 歌いながら戦わないアイドル。
3. ノイズ畑完成。
4. によきつとするとところだけは出来る。

二年越しのライブ

2年後。

無事にライブを終えたツヴァイウイングの二人は控え室で談笑をしていた。

本物の天羽奏になりきり、2年もの間、翼と共にライブをこなしてきた智絵。

上司である弦十郎の計らいで絶唱を使った影響でシンフォギアが使えなくなったというご都合設定をでっち上げてなんとかここまで粘ることができた。

そして、2年もの間、そんな智絵と別行動をしていたRADIOの彼女達が何をして来たかというところ？

「ウチのボーカルの代わりに入って貰ってほんと助かったわ！ ありがとう！」

「いえいえー！ 私も未来もいい経験させてもらいましたよ」

「この畑がああノイズで出来てるって聞いた時は度肝抜かれましたけどね！ リーダーさん」

そう、2年もの間、RADIOの穴を埋めるべく新たに彼女達はRADIO部員を補充して手助けをして貰っていた。

名を立花響と小日向未来という。

当時、中学生だった彼女達をRADIOにスカウトし、未来ちゃんにはADに、そしてビツキーこと立花響ちゃんには智絵の代役をお願いしたのである。

気がつけば2年の月日が経っていた。時が過ぎるのは早いものである。

「いやあ、二人のおかげでだん吉も一年くらいで出来たしなあ」

「タイムマシン作ってるって言われた時は信じられなかったですけど

ね、まさか、本当にタイムマシンにした車作っちゃうんですもん」

「おかげで姉御も無事に回収できたしね」

「でも、姉御が私らのせいで土木に目覚めて一年くらい福島の建築現場で働くってのは予想だにしてなかったけどね」

「ほんとですよ…いつ帰ってくるんだろあの人」

そう、実は既に完成していたデロリアンで死亡する予定であった奏の身柄は彼女達は無事に回収した。

そこまでは計画通りだった。替え玉で頑張ってる智絵とあとは奏を入れ替えてしまえば何事もなく終わるはずだったのだ。

しかしながら、そうは問屋がおろさない。

実はしばらく、RADIOの一員として奏の身柄を預かっていた彼女達。その活動を共に行っているうちに奏は…。

『なんかあたし土木のおっちゃんに腕気に入られたみたいでさあ！

悪いけどー、おっちゃん達と一年くらい家建ててくるから、智絵よろしく伝えといて！』

『ちよ…!? 姉御マジっすか!』

ヘルメットを被ったまま、満面の笑みで奏からそんな風にサムズアップされてはもはや止められるわけもなく。

そんなこんなで2年も経ってしまった。奏もだが、ノイズ退治は福島県で定期的に行っているそうでたまに大量の灰が彼女達に送られて来た。

それらがありがたく畑の肥料に使わせてもらっているものの、この信じられない状況に彼女達もなんとも言えない智絵に対する後ろめたい気持ちがあったりする。

「というわけで、ただいまツヴァイウイングのコンサートにやって来たんですけど」

「ビツキーは2回目なんだっけ?」

「はい！ 1回目は死にかけちゃったんですよね、私」

「あの時は大変だったねー響？」

「奇遇だね！ ウチの末っ子もライブ1回目で死にかけてたよ！ 主に筋肉痛でだけどー！」

「……1回目で必ず死にかけるライブ。」

それほど楽しいライブという事なのだろう。ライブ会場に来ているお客様も熱狂的だ、これを見ていれば彼女達の人気の高さが伺える。

さて、という事でRADIOのメンバーはひとまず末っ子を回収すべく、ツヴァイウィングのコンサートにお邪魔する事にした。

歌が終わり、トークに入ったところを見計らってスタッフに楽器を用意させ、サプライズ乱入を仕掛けてみる。

「という訳で、続いている曲に移ると……」

「はい！ すいませーん！ 私らRADIOという者なんですけどー」

「…ッ!? な、なんだお前達！ ライブ中だぞ！」

「あ、いや、はい、わかってるんですけど、ちょっとウチの末っ子を回収しに来まして……」

そう言っつて、言いづらそうに顔を引きつらせながら風鳴翼に話す我がが兄イこと山口多津音。

すると、翼は首を傾げていた。末っ子、と言われてもピンと来ない、しかしながら、隣にいる相方の彼女は違った。

ライブ中にも関わらずいきなり、ドパアと涙を流して号泣しはじめていたのだ。

そう、翼の相方とは奏の替え玉を二年間もバレずにやってのけたRADIOの末っ子である永瀬智絵その人である。

観客達は思いもよらない状況にどよめいていた。

まさか、風鳴翼の隣にいる天羽奏が別人だとは誰も今まで思っても

見なかったからだ。

すると、智絵は涙ながらに再会を果たしたRADIOのメンバーの元へ駆けていく。

「リーダー！ みんなあー！ 私、頑張ったよ！ 頑張ってたんだよ！

何やってたんだよお！」

「いやあ、申し訳ない」

「実は色々込み入った事情がありました」

「奏…じゃない…そんな…。いや、でも確かに違和感があったが」

「むしろ違和感しかなかったんじゃないかと思うんですけど…」

確かに容姿やスタイル、声も変声機で似せてはいたが素は隠せなかった筈。

智絵が演技をしていたとはいえプライベートでは無理がある部分もあった筈だ。

思わず動揺する翼にそう突っ込みを入れるRADIOのキーボード担当の国舞 谷子。

すると、はっとした表情を浮かべた風鳴翼は俯いたまま、震える声で彼女達にこう問いかけはじめた。

「それじゃ…本物の奏はやっぱりあの時に…」

「つばっち、本物の姉御なら福島県の村で土木のおっちゃん達と家建ててるよ」

「福島県で家!? どう言う事なの!？」

という訳で、ここで翼に対して、事の顛末を事細かく観客の目の前でリーダーが責任を持って説明し始める。

そして、全ての話を聞き終えた観客達も翼も呆気にとられるばかりであった。

つまり、今の今まで隣で歌っていたのは天羽奏を演じていた智絵だったという。

こうして、無事に元の鞘にメンバーの一人が帰ってきたわけであるが…。

「という訳で、ウチのボーカルなんですよね…」

「だが、まだライブ中だぞっ！ 歌も残って…」

「大丈夫です！ ライブはこいつが今日は代行しますので」

「ええ!？」

今回は合同ライブをやらせてもらおう事に。

回収したはずの天羽奏本人が土木の現場に行ってしまったから致し方ない。という訳でツヴァイウイングの片羽は智絵が引き続き担当事に。

代わりにRADIOのボーカルには…。

「それにウチのボーカルの代打を用意しておきましたから！ ビツキーよろしくね！」

「はい！ 任せました！」

「!? 貴女は2年前の!」

「その節はお世話になりました」

ビツキーこと立花響ちゃんに入ってもらおう事にした。

会場からはRADIOとの合同スペシャルライブと聞いて歓声が沸き起こっている。滅多に歌わなかった五人組の国民的女子高生アイドルが2年ぶりにライブをするのだ。

そうなるのも致し方ない。

ライブ会場にいる観客からはこんな声も。

「え！ あの娘達歌うの!」

「てつきりテレビで見てた時は農家の方だとばかり…」

そう、あまりに歌わなすぎてアイドルという事自体を忘れ去られて

いたのである。

という訳で、久々に握る楽器を噛み締めながら、ドラムの岡松雅子がリズムを刻み曲を流しはじめる。

「じゃあ、ウチらの曲からでいいよね?」

「つばっち合わせて! 行くよー」

「くっ…この程度の想定外な出来事! 防人としてこなしてみせる!」

そして、流れ始めるのは彼女達に馴染みのある音楽である。会場も一団となり声を上げながら彼女達の演奏を後押しする。

リーダーのギターが冴え渡り、多津音のベースが下地を作って、谷子のキーボードが駆ける。

ボーカルである翼、智絵、響の三人はハモリながら綺麗な声色を奏でた。

「君が〜♪」

「熱い恋を〜♪」

その声を聞いた観客からも声が上がリ、ライブは盛り上がりを見せる。

曲は彼女達のお気に入りの曲。楽器の演奏と共に彼女達の身体から発せられる三重奏は聞く者たちを魅了した。

そして、ライブは一層の盛り上がりを見せる。ツヴァイウイングの曲に加えてRADIOの曲を交互に演奏しながら歌った。

ツヴァイウイングに馴染みのあるあの曲ももちろん全員でだ。

「歴史を作ろう♪」

「逆光の〜♪」

ライブは大盛況、しかも、今回、サプライズはこれだけではなかつ

た。

なんと、このライブを通してユニットができたのである。というのも？ 普段からツヴァイウイングのファンだったビツキーこと立花響ちゃんは実は歌がかなりお上手。

だからこそ、RADIOのボーカル代理を務めて貰ったのだが、今回のライブが実は響のデビュー戦なのである。

しかし、楽しそうに歌う彼女の歌の出来に休憩を挟んだトークの場でリーダーがマイクを使ってこんなことを言い始めたのである。

「ビツキーええやろ？ つばっち、みんなもそう思うやろ？」

「ああ、確かに上手いな、このライブが初めてとは思えないくらいだ」「本当ですか!! いやあ、翼さんにそう言ってもらえるなんて光栄だなあ」

「つばっちとのハモリ完璧だったよね」

そう言いながら立花響ことビツキーをべた褒めする一同。照れる姿がまた可愛らしい、普段から明るい彼女はRADIOメンバーのお気に入りの後輩であった。

つばっちこと風鳴翼もこれには太鼓判を押す、確かに歌も自分や智絵と遜色なく歌えていた。

頑張って練習してきた事は彼女の歌を聴いていればわかる。

そう言うわけで…。

「新しくビツキーとユニット組んでみたら？ つばっち」

「ええ！ 私と翼さんがですか！」

「そうそう、ユニット名はビツキー&翼で」

「あれ？ ちょっと待って、それ既視感あるよ？ どっかで聞いたことあるフレーズだよ？」

——ユニット名、ビツキー&翼。

なんだか、馴染みが深いユニット名、いや、というより明らかに既

視感がある名前であった。

だが、それを聞いていた翼はというと興味深そうにその名前について思案していた。確かに思っていたよりしっくりきてしまう。

「ビッキー&翼……。良いな、採用しよう」

「よかったね、響ちゃん！」

「やったー！ よろしくお願いしますね！ 翼さん！」

「いや、やっぱりそれ聞いたことあるフレーズなんだけど！ なんか私らに馴染み深い気がするんだけども！」

国舞谷子の異議申し立て虚しく、こうして新たなユニット名がこのライブを通して完成してしまった。

こうして、ツヴァイウイングのほかに立花響と翼による新たなユニットがこのライブを通して出来上がってしまったのである。

その後、二年越しになったRADIOのライブはツヴァイウイングと共に大成功。

興行はうなぎ登りでこれには特異災害対策機動部二課は資金が潤う事、間違いなしだろう。

そして、物語は2年の時を経てようやく動き始める。

今日のRADIO。

1. ビッキーと未来ちゃんがメンバーに。
2. 世界を飛び越える車を作ってしまう。
3. 新ユニット、ビッキー&翼が結成。
4. 二年越しに歌うアイドル。